

●森 円花 (1994~)

ヴァイオリンとチェロのための二重協奏曲 「ヤーヌス」 (2020)

【世界初演に寄せて】

新型コロナウイルスの感染拡大により影響を受けられた皆様に心よりお見舞い申し上げますと共に、感染拡大防止にご尽力されます全ての方に深く感謝申し上げます。社会が困難に直面した時、駆け出しの音楽家としての自分の無力さに、悔しさを感じるばかりでございますが、本日、個性と才能溢れるお2人のソリストとオーケストラが創り上げる新しい音楽が、そして熱き友情が生む音楽が、皆さまに、情念、刺激、勇気、どのような形であれ、何らかの形で、皆さまのお心に届くものであるよう、切に願っております。

【曲目解説】

冒頭で提示される主題がこの作品の核となる。音楽は、ここで提示される主題の展開型を素材とし構築している。

曲は2つのセクション(これらはそれぞれ2つの部分から成る)に分けられる。音楽は一貫して共通の構成要素を持つことで、一種の変奏曲ともいえる形式をとるが、これは古典的な変奏曲とは全く異なるものである。

JANUS(ヤーヌス)とは、2つの異なる顔を持つギリシャ神話の男神である。この作品と神話は直接的な関係性を持たないが、2人の個性の異なるソリストが「ソロ」という共通の声を持つ点、また、ソロとオーケストラという対照的な2つの組織が存在する編成(ソリスト・オーケストラの全ての楽器を同属楽器に統一することで、編成全体においても一種の統一性を持たせている)、更には、2つの単純な音組織により曲全体を構成していることから、タイトルを「JANUS」とした。

このように、「2」という数字がこの作品が持つテーマの一面となっているが、2つの素材を用いることが「1」よりも自由を生むので

はなく、関係性という新しい力を生むことで束縛の力を生むよう試みた。

この作品が持つ技術面、精神面は伝統を継ぐ立ち位置をとっているが、これは古典に戻ることを意味するのではなく、歴史の延長線上の新しさへの挑戦である。

[森 円花]

Vn Solo – Vc Solo – Strings (4-3-2-2-1)

●カールハインツ・シュトックハウゼン (1928~2007)

『クラングー1日の24時間』より 15時間目「オルヴォントン」

バリトンと電子音楽のための (2007)

『クラング』は、1日の24時間を音楽化した24の連作だ。連作の「午後」の部の出発点にあたる13時間目は、電子音楽「宇宙の脈動」である。続く14~21時間目は、この「宇宙の脈動」から再構成された電子音楽に合わせて、ソリストが演奏する一連の作品となっていて、順番に演奏すると、徐々に音域が高く、テンポが加速していくように構想されている*1。

15時間目となる「オルヴォントン」は、24層の電子音から構成される「宇宙の脈動」の19~21層目を抽出した電子音楽にあわせて、バリトン歌手が歌う作品。作品は24のモメント*2に分かれ、各モメントの中心音は、『クラング』全体を統一する24音のセリー*3から規定されている。モメントが進むにつれ、独唱パートの音楽的キャラクターのコントラストが強くなっていくように構成されている。タイトルの「オルヴォントン」とは、作者不詳の奇書『ウランツァの書』に出てくる「超宇宙 super universe」(生物が居住可能な1兆個の星の集合)の名前であり、私たちの住む地球もこの中に含まれているとされる。ギラギラとした金属的な音色で聴衆

*1 22時間目以降は作曲者の死により未作曲。

*2 モメントとは字義的には「瞬間」。シュトックハウゼン作品においては、ある特定の性格を持った音楽的な時間を指す。ここでは「セクション」と読み替えてもよいだろう。

*3 セリーとは字義的には「数列」。これらの数字に音高を対応させると音列となる。それ以外にリズム、強度、音群の構成音数など、様々な要素を数列として管理することで音楽構造を高度に組織化することができる。

の周りをゆっくりと回転する電子音楽のパートは、このオルヴォントンの壮大な世界観を想起させるが、バリトン歌手が歌う内容の大部分は、オルヴォントンのことではなく、この作品自体の楽曲分析という異例な内容だ。作品後半では、数字の比率を偏愛する、シュトゥックハウゼンの作曲美学へと話題が広がっていく。電子音楽部分のピッチやテンポの構造、そして歌唱パートの作曲法を詳細に解説しながら歌うバリトン歌手は、若い頃から晩年に至るまで、折に触れて自作の楽曲分析のレクチャーを行ってきた作曲家本人の生き写しであると解釈できる。

[松平 敬]

初演：2010年5月8日 KOMED ホール(ケルン)
ヨナタン・テ・ラ・パス・サエンス(バリトン) ほか
委嘱：ムジーク・トリエンナーレ・ケルン

●権代敦彦 (1965～)

『**コズミック・セックス**』6人の奏者のための (2008)

「1人称の音楽」

1点、1音から曲は始まる。

点は引き伸ばされ線を描き、面をつくる。

その地平に、私が、立つ。

そこから空を見上げる。

大地を離れてはありえない人間の、欲望が天を仰ぐ。

大地において、大地を超えたものに繋がれようと。

そこに繰り広げられる地と天の交わり、愛の円環が、“コズミック・セックス”。

天地の狭間で欲望と恩寵が激しく交錯する。

この交わりの果てに産み出されるは？

…… (地と天の接するところ、1音の地平線が、断続的に、臚に、遙か彼方に見聞こえる) ……

1つの孤独。

コスモスも所詮、この大地における1つの孤独な心の内にあるにすぎない。

[権代敦彦]

初演：2008年11月22日 津田ホール
権代敦彦(指揮)、永井由比(フルート)、中澤沙央里(ヴァイオリン)、
丹波あいり(チェロ)、渡邊弥生(打楽器)、斉藤絢子(ハープ)、鷹羽弘晃(ピアノ)

●杉山洋一 (1969～)

五重奏曲「アフリカからの最後のインタビュー」 (2013)

この作品が自分と作曲との関わり方を変える契機となった。3.11の震災後作曲する意味を見失い、自らの思考すら判然としない欲求不満が、自分から音楽を剥ぎ取って書かせた気がする。

写経はこんな感じだろうかと思いつつ淡々と音を転写し続け最後まで辿り着き、自分の作曲とは、音楽から距離を置いた、かかる存在と納得するに至った。

以来、その瞬間の感情を作品に残すと心に決め、社会的素材を扱うことにも躊躇がなくなった。思考として自らの片鱗が残ることに、社会に生きる意味を見出しているのかもしれない。

「95年ナイジェリアで一人の作家が死刑に処された。故郷の油田開発による環境破壊を告発し、軍事政府により処刑された。震災来このサロ=ウィワについて思い、故郷を失った人びとを思い、自らが享受している文化の対価、矛盾について考えた。処刑直前に書かれた声明文と刑執行直前に録られたビデオ、毎木曜早朝、彼の墓前に捧げられる賛美歌が、素材として使われている」。(初演時解説より)

[杉山洋一]

初演：2013年9月13日 杉並公会堂小ホール
杉山洋一(指揮)、東京現音計画